

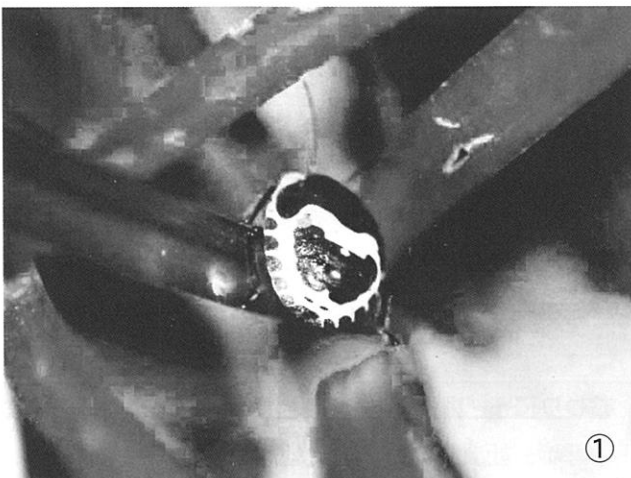
リポート Report

大磯町郷土資料館だより
2007・11・30

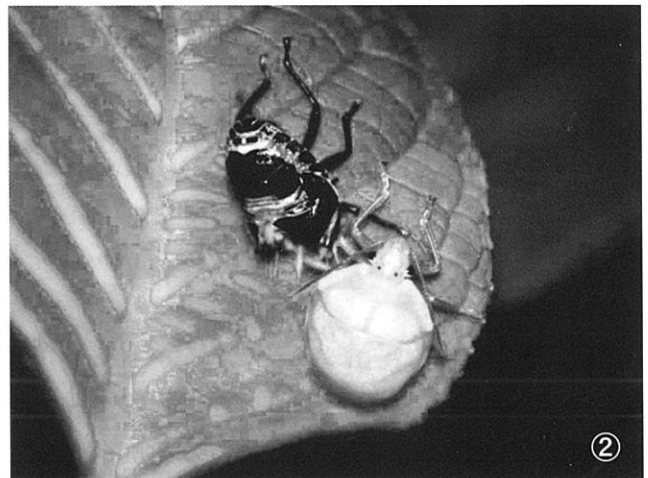
28

目次

- 2 | 企画展「町中の自然ウォッチング」の展示概要
- 3 | 『ついに、アライグマが大磯町にも現れた!!?～アライグマの足跡発見～』
- 4 | 『大磯の蘭疇 — 松本順と大磯海水浴場』展をふりかえって
- 6 | 昆虫発見!! 『カマキリの巻』
- 8 | 博物館実習生による「大磯の登り窯 城山窯」展／資料の寄贈



①



②



③



④

アカスジキンカメムシの脱皮の様子（木村純子氏撮影）

①5令幼虫 ②脱皮直後 ③脱皮後しばらく経過 ④成虫

企画展「町中の自然ウォッチング」の展示概要

大磯町郷土資料館では平成19年10月21日(日)から平成20年1月14日(月)まで、企画展「町中の自然ウォッチング」を開催しています。自然分野の展示としては、これまで町東端のランドマークとして知られる高麗山、海岸域に関しては当町、唯一の岩礁帯である照ヶ崎など当町において特出すべき自然とそこに生息する生き物を取り上げた企画を主に行なってきました。この度の展示では、我々にとってごく身近な住宅地で見られる生き物を紹介しています。本展は小テーマ「王城山周辺の野鳥・昆虫」と「実体 生物図鑑」の二部構成で展開しています。

王城山周辺の野鳥・昆虫

野鳥・昆虫の生態写真を展示しています。王城山周辺というタイトルを付けていますが、王城山山頂付近で撮影されたものではなく、付近の住宅地で撮影されたものを展示しています。資料は同地域にお住まいの木村純子さんに提供していただきました。木村さんは2001年からこれまで、ご自宅の庭に飛来してくる野鳥・昆虫の様子を撮影されてきました。移動性の高い野鳥・昆虫の撮影は一瞬のタイミングを捉えることが求められ、根気が必要です。こうした地道な活動は、博物館活動に共通するものであり、身近な場所に生息する生き物を広く知っていただくという趣旨のもと、当館の企画展で取り上げました。

木村さん宅のお庭には低木や種々の野草が植えられ、トンボが産卵可能な水場があります。草木には昆虫の食草、食樹や秋から冬にかけて、野鳥の餌となる木の実を付ける植物も含まれています。水があり、また餌となる植物の種類が豊富にあることで、多くの種類の昆虫や野鳥が飛来してくるのだと思います。また、最近では、野外において昆虫の産卵から羽化するまで様子を観察されるとともに、ご自身でも昆虫を飼育され、発達の経過を記録されています。本展では、こうした観察の成果を昆虫70種、野鳥15種の生態写真を展示するとともに、ゴマダラチョウ、クロスジギンヤンマの産卵から羽化までの様子の写真を展示し、経過を紹介しています。



【企画展「町中の自然ウォッチング」展示風景】

実体 生物図鑑

先述の「王城山周辺の野鳥・昆虫」は生態写真のみの展示であり、写真だけでは伝えづらい野鳥、昆虫の大きさや細部の模様を概観していただくよう、当館所蔵の昆虫標本や鳥類剥製を展示しました。展示資料には近年、当町に定着したアゲハチョウ科のナガサキアゲハ、タテハチョウ科のツマグロヒョウモンや神奈川県内で急速に分布を広げているタテハチョウ科のアカボシゴマダラも含まれています。また、昆虫の食樹という観点から、樹木の見分け方についても触れました。当町で普通に見られる樹木16種の樹皮や葉の写真とともに乾燥させた葉をラミネートした標本も展示しています。

おわりに

近年、社会全般において地球温暖化が叫ばれる中、当町でもナガサキアゲハ、ムラサキシジミ、ツマグロヒョウモンなどの南方系の昆虫がごくあたりまえのように確認されるようになりました。自然発生的に北上したという見方もありますが、一方で人為的に他の地域から持ち込まれ、気候がその生物と適合したことで定着したケースもあるようです。刻々と変化する環境の中、我々と同様に自然界の一員として生活を営む野鳥や昆虫、各々の存在を認識し、あらためて種の多様性と環境保全に関する重要性、またモラル等を、本展を通して感じていただけたらと思います。

最後になりましたが、資料をご提供いただきました木村純子さん、昆虫の同定に際し、ご配慮いただきました岸一弘さんに厚く御礼申し上げます。

(当館学芸員／北水慶一)

『ついに、アライグマが大磯町にも現れた!!?』 ～アライグマの足跡発見～』

2007年8月21日夕方、大磯町寺坂上向田の谷戸の水田で、大磯町郷土資料館職員が、アライグマと思われる足跡を発見しました。稲の出穂に際して、一時的に水田の水を抜いていたため、足跡が確認できました。翌日の22日に資料館の職員数名で、石膏の足型を採取。下図がその石膏の足型から拓本をとったものです。



【アライグマと見られる足跡】

分類

科名：アライグマ科 学名：*Procyon lotor*

アライグマは、愛嬌のある顔としぐさからペットとしての人気の高い動物でした。特に1977年にテレビ放映された「あらいぐまラスカル」やハンドソープのCMで人気はさらに高まりました。しかし、最近になって、アライグマは私たちの生活を脅かす害獣として注目をあびるようになりました。近年ペットとして飼われたアライグマが遺棄もしくは逃亡したものが、野生化するようになったのです。国内ではじめての野外繁殖は、1962年に岐阜県可児市で確認されました。（愛知県の動物園からの逃亡个体）

日本各地でアライグマによる被害が数多く報告されるようになり、環境庁は、現在「特定外来生物」に選定しています。

野生化したアライグマは天敵（ピューマなどの肉食獣）が日本にいないため、急速に生息域を広げて、40を超える都道府県で現在生息が確認されています。

個体数が増加するに従い、農作物被害や野生在来種への脅威が増幅しています。環境省では、外来種対策3億円のうち、1億円以上を奄美大島、沖縄県のマングース

にあて、その残りをアライグマ、カミツキガメ、外来魚の殺害費用としています。この施策に対して、環境省や地方自治体、動物愛護団体とその賛同者の推進派と反対派で、論争の対立があります。

アライグマの生息分布

＜アメリカ合衆国＞＜カナダ＞＜メキシコ＞

アライグマは北米産原産であり、日本には生息していませんでした。

アライグマの生物学的特徴

アライグマは頭胴長50cm前後、尾長25cm前後の中型哺乳類で、アナグマ、タヌキ、ハクビシン、キツネと体格は近いことがわかります。

クマ等と同じく、踵をつける蹠行性（しょうこうせい）の歩き方をします。

生態

本来、水辺近くの森林に生息します。夜行性で、昼間は他の動物が地中に掘った巣穴、木の洞、時には農家の納屋や物置等で休みます。基本的に単独性です。

前足を器用に使うことができ、木登りや泳ぎが得意です。雑食性で、両生類、爬虫類、鳥類の卵、昆虫類、さらに畑にあるトウモロコシ等の農作物も食べます。

視覚があまりよくないため前足を水中に突っ込んで獲物を探る姿が手を洗っているように見えることから、和名が付けられたという説が一般化していますが、近年の研究では、野生のアライグマは食べ物を洗ってから食べたりはしないことが、明らかになっています。

主要参考・引用文献・URL

- 子安和宏「フィールドガイド足跡図鑑」1993日経サイエンス社
- 高桑正敏他「侵略とかく乱のはてに～移入生物を考える～」2003 神奈川県立生命の星・地球博物館
- 環境省：<http://www.env.go.jp/nature/intro/>
- 「日経サイエンス2004年11月号」P18～20「外来動物ミニ図鑑 野に放たれたラスカルたち」
- 「外来生物辞典」池田清彦 東京書籍

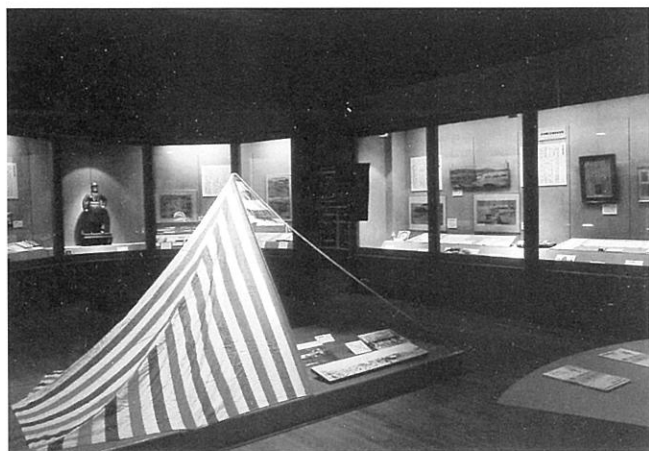
（当館臨時司書職員／伊與木美乃）

『大磯の蘭疇-松本順と大磯海水浴場』展を ふりかえって

明治40年(1907)に松本順(良順)が亡くなってから今年で100年を迎え、当館では平成19年7月3日(火)から9月2日(日)まで、松本順没後100周年記念展と銘うって標記の特別展を開催しました(写真1)。

松本順(1832-1907)は、安政4年(1857)に江戸幕府の海軍伝習生御用医として長崎に赴任し、オランダ海軍軍医ポンペ・ファン・メーデルフォールトから本格的に蘭医学を学び、ポンペとともに我が国最初の西洋医学に拠る公立病院である長崎養生所(後の長崎大学医学部)を設立しました。また、江戸に戻ってからは、幕府の西洋医学所頭取として、さらに15代将軍徳川慶喜の侍医としても活躍し、日本における近代西洋医学の基礎を築いた人物です。明治新政府後も軍医制度を整えて陸軍軍医総監を務めるなど、医学界はもとより日本の近代史上で欠くことのできない人物といえます。

さて、大磯とのかかわりについては、明治18年(1885)に、松本が大磯海水浴場を開設したことによります。松本は西洋医学に基づく先端医療のひとつとして早くから海水浴の効用に注目し、海水浴場開設を視野に各地を視察調査してきましたが、それが大磯において実現しました。当時はまだ海水浴という行為の認識はなく、海水浴場の設置に理解を示す人も僅かでした。大磯でも宮代謙吉と宮代新太郎の2名が開設に意欲を示したのみでした。当時の大磯は宿場の機能を失い経済的に疲弊しており、海水浴場の開設によって町の活性化を期待する気持ちも大きかったようです。



【写真1 松本順没後100周年記念展】

その後、松本の熱心なPRが功を奏し、やがて「別荘地大磯」という極めて特徴的な文化が花開くこととなります。松本は、まさに近代大磯における別荘文化の担い手であったといえるでしょう。

さて、そのような松本と大磯とのかかわりを示した展示は、これまでに2回実施されています。

1回目は昭和40年(1965)に大磯海水浴場開設80周年記念として行なわれた『松本順先生と大磯町』(於:大磯町立図書館)です。その様子は、簡単な出品目録と展示風景を撮影した写真からうかがうことができます。図書館の一角に机を並べてその上に陳列するという、素朴ながらも松本の威徳を慕う町民の気持ちが感じられる内容でした。集まった資料は58点を数えおり、松本の面影が大磯町内に色濃く残っていたことを印象付けます。

2回目は、昭和59年(1984)に行なわれた海水浴場開設100周年記念展(於:大磯町立図書館)です。当時はいわゆるバブル期にあたり、財政的な裏付けのもとで積極的に展開した海水浴場開設100年事業の一環でした。関連事業として、当時ご存命であった松本順の孫にあたる松本銚太・野村順之助両氏を迎えて座談会を催すなどしており、その様子を含めた記念誌を刊行しています。

さて、過去2回の展示は、いずれも海水浴場開設の節目の年を記念したものです。1回目は松本にゆかりのある品々を集成しており、2回目は海水浴関連資料が中心でした。3回目となる今回は、松本の人物像と大磯の海水浴とを総体的にとらえようという内容であり、過去2回における展示の総括的な性格を持っています。松本が大磯にかかわりを持つのは後半生であるため資料の片寄りは否めませんが、当初の予想以上に資料が集まりました。企画展示室の限られた面積により、すべての資料を紹介することができなかったのは口惜しい限りです。また、本展示に際して、頁数は少ないものの図録を刊行することができたことは大きな意義がありました。しかし、発注後になって新たに確認された貴重な資料が、図録掲載に間に合わなかったという事態が生まれています。もっと長期的な調査と準備が必要であったことを今更ながら痛感しています。

ところで、展示終了直後に新たな資料が確認されたので紹介しておきます。古書展において「大日本名醫之肖像」と題した印刷物(写真2)が出展され、幸いにも購入

することができました。これは明治15年(1882)に西尾篤なる画工の手によるもので、左上から順に、緒方君、佐藤君、池田君、橋本君、石黒君、伊東君、三宅君、戸塚君、佐藤先生、松本先生、林君、桐原君、長谷川君、榎村君、杉田君、松山君、佐々木君、岩佐君の表記と各氏の肖像が描かれています。これらの人々は、当資料と刊行年の近い『東京銘醫大見立表』(明治16年、鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』昭和8年刊に所収)や、残されている写真から人物を特定することができます。すなわち、緒方君とは緒方惟準のことであり、以下、佐藤進、池田謙齋、橋本綱常、石黒忠恵、伊東方成、三宅秀、戸塚文海、佐藤尚中、松本順、林紀、桐原眞節、長谷川泰、榎村清、杉田玄端、松山棟庵、佐々木東洋、岩佐純を指していると思われます。いずれの人々も文字通り当時の西洋医学界における第一人者たちであり、その中心に松本順がいたことになります。当時の医学界における松本の存在を再認識させる資料といえるでしょう。

さて、長らく「大磯の恩人」と讃えられてきた松本ですが、地元大磯においてようやく正面から取り扱うことができたというのが担当者の正直な思いです。今後も引き続き関連資料や情報の収集に努めていきたいと考えています。



【写真2 「大日本銘醫之肖像」】

最後になりましたが、本展示に際してご協力を賜りましたご遺族、関係者、関係機関に対しまして、あらためて厚く御礼申し上げます。

(当館学芸員／佐川和裕)

ブログ形式の日々更新ウェブサイト 「大磯町郷土資料館ノート」開設!



ブログ形式のサイトを作成しました。

名前は、「大磯町郷土資料館ノート」。URLは、

<http://scn-net.easymyweb.jp/member/oisomuseum/>

「資料館を身近に感じてほしい!」

展示された資料や公式サイトだけでは語りきれない日々
の内容や活動を、多くの写真と読みやすい文で発信して

いくのが、このサイトの使命と感じています。また、いつでもどこでも閲覧できるというのが、インターネットの利点です。

資料館に来たことがない方にも、すでに来たことのある方にも、サイトを通じて少しでも資料館を身近に感じていただき、足を運んで頂くことを願います。

携帯電話から閲覧も可能

携帯専用URLは、

<http://scn-net.easyweb.jp/mobile/member.asp?u=oisomuseum>

又、左下QRコードを携帯電話の内蔵カメラのバーコードリーダー機能で撮影すれば、アドレス情報が表示され接続できます。



今後、更にデジタル化したコンテンツを取り入れていく予定ですので、ご期待ください。

(当館臨時学芸員／山口由紀子)

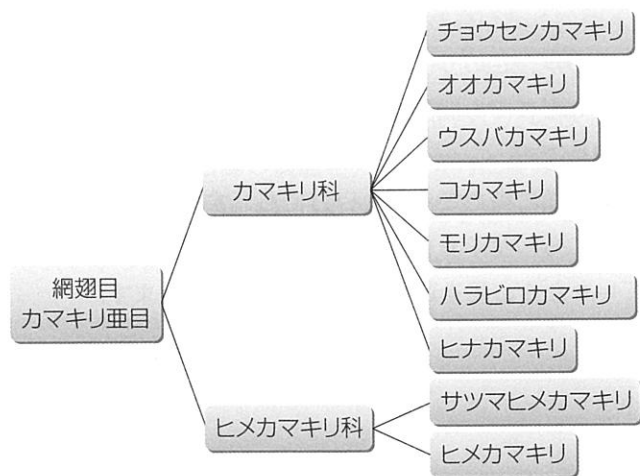
昆虫発見!!『カマキリの巻』

他の昆虫では持ち得ない鎌状の前脚を持った独特な姿形をし、交尾中の雄が雌に食べられてしまうこともある、昆虫界では抜群の知名度を誇る昆虫。・・・そう、カマキリです。胸を張り羽を広げ鎌を構えて威嚇する、我々人間を始めとする敵に立ち向かうあの姿。1度は目撃したことがあるのではないのでしょうか。種類の違いはあれど、カマキリは日本全国にわたって生息しており、ここ大磯町郷土資料館の建つ城山公園でも時々目にすることが出来ます。

今回はそんなポピュラーな昆虫、カマキリの生態と知られざる一面をご紹介します。どこか可愛らしくて憎めない昆虫、カマキリ。これを読めば、あなたのカマキリへの見方が変わるかも知れません。

カマキリってどんな昆虫？

カマキリは全世界で凡そ2000種が確認されており、日本では2科に属する9種が生息しています。日本ではチョウセンカマキリ、オオカマキリが主で、単にカマキリと呼ぶ場合はチョウセンカマキリを指します。



【日本におけるカマキリの種類】

カマキリは1年1世代で、卵で越冬する昆虫です。バナナ状の卵鞘に詰まった卵は、木の枝その他に産み付けられ、春に孵化します。幼虫は不完全変態、つまり蛹期を経ずに成虫への脱皮を行います。

古くはバッタ同様直翅目の1科とされていたカマキリ

ですが、最近では網翅目の1亜目と考えられています。網翅目には他にゴキブリがいます。姿こそ違え、あの人間の生涯の敵とも言えるゴキブリといわば遠い親戚なのです。

6本の脚のうち、カマキリの名の由来にもなっている鎌状の前脚2本は歩行には使われず、餌となる昆虫類を捕食する際に用いられるので捕獲肢と呼ばれます。また、逆三角形をした頭には大きな2つの複眼と3つの単眼、そして餌を噛み砕く鋭い歯をもつ大顎があります。カマキリはこの頭部を自由に動かすことができるため、獲物を狙う際に非常に役立つのです。



【カマキリ 写真提供:飯田福信氏】

美味礼讃！

カマキリは肉食性の昆虫です。じっと動かずに待ち構えて獲物が近付くと瞬時に飛びかかり、あの鎌で捕まえ素早く口へ持っていきや否や、鋭い歯でバリバリと食べてしまいます。主に自分より体の小さい昆虫を餌としますが、時には小さいカエルやトカゲを捕まえて食べたり、雌が交尾中の雄を食べてしまうケースもあります。では何でも餌と見なすかと言われるばそうでもありません。カマキリは死んだものには見向きもせず生きて動くものしか口にしない、というこだわりを持つ何ともグルメな昆虫なのです。

神よ、我を許し給え

カマキリが獲物を狙う時、前脚の鎌をたたんで左右を合わせた姿勢をとりますが、この姿勢が両手を合わせた祈りの姿を連想させることから、日本では「拝み虫」と

も呼ばれます。また、英名でも「Praying mantis」、すなわち「祈り虫」と呼ばれています。あたかもこれから決行する殺生の罪への許しを請うごとく神に祈りを捧げるカマキリは、弱肉強食の自然界において最も信心深い昆虫なのかも知れません。

必殺！カマキリ拳

鋭い鎌を使い、自分よりも巨大な敵を仕留めるカマキリ。そんなカマキリの動作からヒントを得た螳螂拳^{とうろうけん}という拳法があるのをご存知でしょうか。

無数にあるといわれる中国武術の門派には、象形拳^{しょうけいけん}という動物の動作や人間の形態を模倣した動作によって構成されている拳法が存在します。螳螂拳も象形拳の1つで、この他には映画で有名になった酔拳^{すいけん}を始め、蛇拳^{じゃけん}、猿猴拳^{えんこうけん}、鴨形拳^{おうけいけん}、鷹爪拳^{ようそうけん}、白鶴拳^{はつかくけん}などがあり、名前を一見ただけで何の動きを模した拳法かお解り頂けると思いますが、これらは映画の中だけのものと思いきや、実際に存在する拳法なのです。

伝説によると、明末～清初に山東省出身の王朗という人物が少林拳を習得したのち修行を続けていたところ、1匹のカマキリが蟬を捕らえる場面を目撃し、この時のカマキリの動きを自らの拳法に取り入れて螳螂拳を編み出したとされています。

螳螂拳は大別すると激しく力強い動きの硬螳螂と柔らかな動きの軟螳螂に分かれ、前者には七星^{しちせい}、梅花^{はっば}、八歩^{はちぽ}、秘門螳螂拳^{ひもんとうろうけん}、後者には六合螳螂拳^{ろくごう}などがあり、現在ではこうした様々な分派が生み出され、内外に広く伝承されています。この拳法の特徴は独自の手法と腿法^{とうほう}から成り、多彩な套路^{たうろ}(型)・技法を駆使した迅速果敢な攻防、そして剛柔さを兼ね備えた点にあると言えます。カマキリの動き同様、技撃性が強く、非常に実戦的な拳法なのです。

カマキリから学ぶ人生論

古来より日本人は中国古典から人生の指針となる教えを学んできましたが、この中にはカマキリが登場する故事が数多く見受けられます。

儒家の五経の1つ『詩経』の研究書で、漢の韓嬰が著した『韓詩外伝』に次のような話があります。

斉の莊公が獵に出掛けた際、1匹のカマキリが脚を

挙げて車輪を打とうとしていました。莊公は御者に何の虫か尋ねると、御者は「これはカマキリという虫で、進むばかりで退くことを知りません。己の力を量ろうとせず、軽々しく敵に向かっていくやつです。」と答えました。すると莊公は「これが人であったなら、天下に名を轟かす勇士となったであろう。」と言って車を引き返し、カマキリを避けたのです。

この話を出典とする成語として「螳螂の斧」があります。ここではカマキリの勇猛果敢な態度を賞していますが、今では己の力をわきまえずに強敵に立ち向かう、はかない抵抗の喩えとして使われています。類話は『莊子』や『淮南子』にも見えるほか、「螳螂の斧」の類語として微弱な兵備を意味する「螳螂の衛」があります。

また、この他にも「螳螂蟬を搏つ(螳螂蟬を窺う)」という成語があります。前漢の劉向が編んだ逸話集の『說苑』にある、蟬を捕らえようと狙っているカマキリが側にいる雀に狙われていることに気付かない、という一節を出典とするもので、類話は『莊子』、『呉越春秋』、『韓詩外伝』にも見られます。これは目の前の利益ばかりに夢中になり、自分の身に降りかかる災難に気付かないことの喩えです。

このように数多くの中国古典にカマキリが登場することから、昔の中国人はカマキリの姿勢から学ぶことが多々あったようです。ここでカマキリは我が身を省みることが知らないために己の浅薄さに気付かず、結果そこから向上し得ない人間の代理として登場しており、同時に正しい道を見失いがちな人間への戒めとして存在しています。カマキリは古人だけでなく、我々現代人の生き方をも教示してくれる何とも有難い昆虫なのです。

主要参考文献

- 平嶋義宏 森本桂 多田内修『昆虫分類学』1990 川島書店
- 伊藤修四郎 奥谷禎一 日浦勇『原色日本昆虫図鑑(下)』平成2年 保育社
- 常石茂他『中国故事物語』昭和42年 河合書房
- 劉安編 戸川芳郎 木山英雄 沢谷昭次 飯倉照平訳『中国古典文学大系6 淮南子・說苑(抄)』1986 平凡社
- 吉田邦博他『Books Esoterica第34号 中国武術の本 幻の拳法と奇跡の技の探求』2004年 学習研究社

(当館臨時学芸員／曾根田貴子)

博物館実習生による「大磯の登り窯 城山窯」展

大磯町郷土資料館は、毎年学芸員資格取得のための実習生を受け入れています。本年度は、4つの大学から5人の学生が実習を行いました。

実習の目玉である常設展示室内小コーナーの展示替作業では、「大磯の登り窯 城山窯」展を作成しました。ここでは、大磯町郷土資料館のある城山公園の前身、三井財閥の別邸城山荘に昭和10年に設立された窯の歴史、構造、造られた作品などを写真やキャプションを通して紹介しています。展示リーフレットも編集し、城山公園内に窯があったことを伝える興味深い展示です。尚、中

央に設置された登り窯のジオラマは構造を分かりやすく示し、今は無き城山窯を偲ばせます。



【平成19年度博物館実習生】

地 区	受 入 先	資 料 名
高 麗	中村 千代氏	足踏ミシン 他
大 磯	麻生フミ江氏	ボウシュウボラ
	安部川征彦氏	婚礼道具 他
	飯田 福信氏	貝標本
	勝又 哲生氏	船の櫓 他
	河原 良三氏	扁 額
	木村 純子氏	メジロの巣 他
	高橋 虎吉氏	稲荷講太鼓 他
	寺本 和代氏	雛人形
	西海栄喜繁氏	ハサミバコ 他
	福田 良昭氏	漂着物(ウキ)
東 小 磯	新見 紀雄氏	下 駄
西 小 磯	地神講中 (西小磯東)	地神講道具
	石井 祥子氏	板戸 他
	鈴木 孝明氏	ヒゲクジラのヒゲ

地 区	受 入 先	資 料 名
西 小 磯	波多野正之氏	軍服 他
国府新宿	鈴木 光枝氏	書 籍
国府本郷	小島 育男氏	刀 剣
	加藤 広美氏	古写真 他
	原田 房光氏	稲荷講道具
	原田 好夫氏	
生 沢	吉川 錦利氏	リヤカー 他
	鈴木 一男氏	ソバチョコ
寺 坂	竹内 治雄氏	ショイバシゴ 他
	杉崎 節子氏	タンス
二 宮 町	西山 敏夫氏	衣服 他
平 塚 市	辻田奈緒美氏	雛人形
	平田佐千子氏	衣服 他
伊勢原市	二挺木 恵氏	神 棚
藤 沢 市	矢野 慎一氏	石包丁
新 宿 区	近藤敬一郎氏	書籍 他

ご協力ありがとうございました。

【表紙写真】

アカスジキンカメムシは本州・四国・九州に分布するキンカメムシ科の昆虫です。成虫は体が緑色で、赤色のスジが入っているのが特徴です。

※写真は同一個体の経過を撮影したものではありません。
※参考文献: 石原保『学研生物図鑑 昆虫Ⅱ〔バッタ・ハチ・セミ・トンボほか〕』1990学習研究社

Report -大磯町郷土資料館だより- No.28

平成19(2007)年11月30日発行

編集・発行 大磯町郷土資料館

〒255-0005 神奈川県大磯町西小磯446-1

TEL. 0463 (61) 4700 / FAX. 0463 (61) 4660